

第43回

わたしからの

人権メッセージ



2022年度 特選作品集
堺市人権教育推進協議会

第43回

わたしからの人権メッセージ

特選作品集

「わたしからの人権メッセージ」発刊にあたって

堺市人権教育推進協議会では、人権を守り、平和で差別のない明るいまちづくりをめざして、市民主体の活動を進めています。その活動の一つが、本年度で第四十三回を迎える「わたしからの人権メッセージ」です。多くの市民の皆様が日常生活の中の人権問題に関心を持ち、自ら考え綴ることによって人権についての認識と理解を深め、さらに作品の共有を通して広く人権啓発につなげることを目的として実施しております。

今年度も、私たちの呼びかけに幅広い年齢層の皆様から、数多くのメッセージを寄せていただきました。作品を応募していただきました皆様に心からお礼を申し上げます。厳正なる審査の結果、優秀な作品二十点を特選作品とし、ここに、「わたしからの人権メッセージ」特選作品集として本冊子を発刊します。

人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和で差別のない社会を実現することは私たちにとつて共通の願いです。しかしながら、世界ではロシア政府によるウクライナ侵攻がおこり、多くの民間人のかけがえない命が犠牲となるなど、国際社会の平和と秩序が根幹から脅かされる許し難い事態がおこっています。また、新型コロナウイルスの感染拡大は、いまだ収束にいたっておらず、

感染症に対する偏見やインターネット上の悪質な差別・誹謗中傷が発生するなど、人権問題は複雑・多様化しています。

そのような中、堺市では、「堺市平和と人権を尊重するまちづくり条例」を施行し、すべての人の人権が尊重され、安心して暮らすことのできる都市の活性化の推進に取り組んでいます。昨年には、「堺市SDGs(エスディージーズ) 未来都市計画」及び「堺市基本計画二〇二五」を策定し、平和と人権を重視した市政を展開することで、誰一人取り残さない平和と人権が尊重される社会の実現をめざしています。

私たちも一人ひとりが、さまざまな人権問題を自分自身の課題として受けとめ、日々の生活の中で積極的な行動へと発展させていくことが大切です。

本冊子には、作品を応募してくださった方々の「人権が尊重される豊かな社会の構築」にむけた、真つ直ぐで熱い想いがつまっています。ここに掲載されている作品の二つ一つが、一人でも多くの方々に愛読され、私たちの身近にある人権問題を考えるひとつのきっかけとなり、私たちのまち堺から人権文化の花を咲かせる一助になることを期待しています。

二〇二三年十二月

堺市人権教育推進協議会

会長 金 丸 尚 弘

もくじ

□ めぐみさんへ	1
□ 魚つてすごい	3
□ かいじょ犬にやさしい社会へ	5
□ 質の高い教育をみんなに	7
□ 自分らしく生きる	9
□ お互いを理解する心	13
□ お兄ちゃんは障がい者	15
□ 知ることの大切さ	17
□ 私とズボン、弟とスカート。	19
□ LGBTについて	23

□ 男女平等	・ ・ ・ ・ ・	25
□ 人に頼ることの大切さ	・ ・ ・ ・ ・	29
□ あふれる優しさ	・ ・ ・ ・ ・	31
□ 平和な世界にするために	・ ・ ・ ・ ・	33
□ 自分らしく生きたい	・ ・ ・ ・ ・	37
□ 私はバイトがしたい	・ ・ ・ ・ ・	39
□ 田中秀樹という名の中国人	・ ・ ・ ・ ・	41
□ 由系アメリカ人？日本人とアメリカ人!! 人間。	・ ・ ・ ・ ・	43
〈事務局（注）取り消し線を入れていることに筆者の思いや意味が込められています。 □ つながりを求めて	・ ・ ・ ・ ・	47
□ 花咲く道を進む	・ ・ ・ ・ ・	49

※御本人の許諾の得られたものを掲載しております。

めぐみさんへ

小学校一年

西^{にし}村^{むら}貫^{かん}太^た

めぐみさんおげんきですか。

ぼくは、八月十一日にめぐみさんのえいがをみました。なぜそんなことをするのかしんじられなくて、とてもかなしいきもちになりました。ふねの下から、「おかあさん。」とないてよんでいたところがわすれられません。

めぐみさんは十三さいのときにらちされて、四十五ねんかんだんなきもちでいますか。ぼくの四十五ねんごは五十二さいです。そのあいだ、かぞくやともだちにあえないなんて、めぐみさんはさみしくて、つらいだろうな。そうぞうできないです。はやくみんなにあいたくて、たすけにきてほしいし、日本にはやくかえりたいとおもっているだろうな。

めぐみさんやらちされたひとたちをたすけるためには、たくさんひとたちにしつてもらうことだとききました。いま、ぼくができることは、知らないおともだちにうたえて、しつてもらえるようにがんばることです。

めぐみさんが一日もはやくかぞくにあって、いえにかえれる日がきてほしいとねがっています。その日までまつていてください。そして、おげんきでいてください。



出典：北朝鮮による日本人拉致問題啓発アニメ「めぐみ」

魚ってすごい

小学校二年

山^{やま}本^{もと} 菜^な々^な美^み

わたしは、おすしやさんにいらつしやいという本を読みました。この本をえらんだりゆうは、わたしはおすしがすぎだからです。ひょうしにはたくさんのおすしのしやしんがのついで、おはなしが気になりました。

本の中では、お魚がおすしやさんでおすしになるまでのお話が書かれていました。その中で一ばんきになったのは、どのお魚も口や目、それにほねやいぶくろがあつたことです。わたしがたべるおすしはいつもきれいな形でおさらにのつて出てきます。おすしやさんは、一つ一つ、ほうちようをつかつてほねやいぶくろをきれいにとつていて、すぐくたいへんなさぎようをしてきてくれることにびっくりしました。

この本を読むまえはおすしをたべるときただおいしいなと思つてたべていました。でもわたしがたべていたのは、わたしと同じ目や口があつて、海の中で生きていたんだなと気づきました。これからはごはんをたべるときは、魚だけじゃなく、お肉ややさい、そしてつくつてくれた人にもありがとうの気もちをわすれないようにします。



かいじよ犬にやさしい社会へ

小学校三年

大平 莉樹斗
おお ひら り き と

ぼくは、かいじよ犬って何だろうと思って『かいじよ犬シンシア』という本を読みました。

かいじよ犬は、体を自由に動かせない人の生活を助けます。木村さんという方は、交通事故にあつて大けがをして、むねから下がまったく動かなくなり、指にさえ力を入れることができなくなりました。木村さんは、『病院で過ごすのはいやだ、家に帰りたい、そしてまた働きたい。』と思つて、リハビリに取り組んで、車いすに自分で乗つたり、おりたりできるようになりました。指も働くようになって食事をしたり着替えをしたりすることができるようになりました。でも、木村さんはまだ全てができるわけではありません。そんな時、ペットのシンシアをかいはじめました。シンシアはテストに合格して、4か月間くんれんに行きました。そして木村さんの家に帰つてきて3週間がたつと、木村さんの指示を聞くようになりました。家の中では、冷蔵庫から物をとったり、フロップピーを拾ったり、電話にでたり木村さんの仕事の手伝いもします。家の外では、エレベーターのボタンを押したり、チケットをとったりして木村さんを手助けしてくれます。電車に乗ることもできます。こんなにも色々できて、生活の手

助けしているシンシアはかつこいいヒーロー犬だとぼくは思いました。

日本ではもうどう犬は入ることができのにかいじょ犬は入れないところがありました。でもシンシアがテストを受けて合格したので、かいじょ犬も少しずつ入れる場所が増えました。木村さんとシンシアが住む宝塚市は、市をあげてかいじょ犬をおうえんすることを決めました。そして、かいじょ犬の入店をみとめることを表した「かいじょ犬同はんワッペン」を作って配りました。また、大手スーパーが、全国のお店でかいじょ犬が自由に入ることを許しました。最近では、近くのスーパーなどでもかいじょ犬OKのシールをぼくもよく見かけます。今の時代はこの時よりもかいじょ犬が入れるしせつは増えていると思います。それは、体の不自由な人にとってとても助かることだと思います。

この本を読んでから、マークについて調べたら、スイスやスウェーデンにはこんなマークはないそうです。なぜならついていなくてもどこでも入っていいからです。かいじょ犬たちのような犬が、社会に当たり前に受け入れられているからです。なので、日本もシールがなくてもかいじょ犬やもうどう犬などの犬たちが、もつと当たり前に受け入れられるやさしい社会になって、体が不自由な人ももつともつと、生活しやすい日本になればいいなと思いました。

質の高い教育をみんなに

小学校四年

大窪実愛
おおくぼ みのあ

わたしはSDGsの勉強で、世界中で五千七百万人の小学生が学校に通えないと書いてあるのを読んで、びっくりしました。わたしと弟は、この夏、SDGsについて学びました。その中の、四つ目の目標、『質の高い教育をみんなに』について、今の日本の状況を調べてみました。みんなも世界中のこともたちのことを考えられるように、これを書きました。

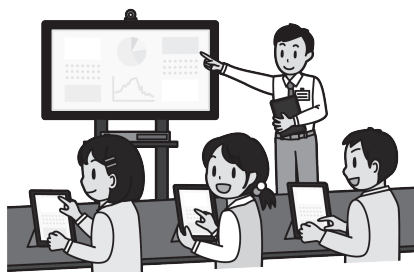
日本では、高等教育にお金がかかりすぎるため、大学やせん門学校に行くことをあきらめる生徒たちがたくさんいます。しゅう入の少ない家庭にとつて、入学金とじゅう業料の他に、アパートや電気代、食ひなど、子どもを大学に行かせることは、とても大きなふたんになります。

2014年に、政府は、『子どものひん困対策のすい進に関する法律』をせい定しました。この法律には、四つの大切な柱があります。教育の支えん、親の仕事探しの支えん、生活の支えん、経済的な支えんの四つです。

わたしは、こんな法律が作られていたことを初めて知っておどろきました。日本の中で、ひん困で大へんな思いをしている子どもたちがいることも知りませんでした。

勉強できることのありがたさを知って、これからは、学校でもよく集中してできるだけ知しきを使っていこうと思いました。SDGsの目標について、周りの人と教え合ったり、話すことで、SDGsの目標達成へのモチベーションを高めていきたいです。

子どものように来が、生まれ育った環境によって左右されることなく、みんな平等にいろいろなことにちよう戦していける社会を目指したいです。みんなで、できることから始めていきましよう。



自分らしく生きる

小学校六年

高^{たか}

畑^{はた}

六^{りっ}

花^か

最初に違和感を感じたのは、保育園の頃でした。スカートが嫌で、パンツばかり履くようになりました。腰あたりまで伸ばしていた髪も、えり足が見えるほど切りました。何でだか、女の子らしいものが苦手になったのです。

「朝起きたら、男の子に変わってないかな。」と、毎日考えていました。と、保育園でプールが始まりました。女の子用の水着を使う事を渋っていると、担任の先生が「可愛いのに。似合ってるよ。」

と言いました。その言葉を聞いて、「自分のこの気持ちは、おかしいのかな。」

と思い、そつと気持ちにふたをしました。あれだけ拒否していたスカートもピンク色を選ぶようになりました。そして、その日からまたロングヘアを目指して髪を伸ばし始めたのです。

次の転機は、小学四年生でした。好きなネット配信のグループのメンバーがLGB T Qだと知りました。それがきっかけで、保育園の頃に感じていた気持ちが再びあふれ出してきたのです。

「何でトイレのマークは、男が青、女が赤と決まっているんだろう。」

「何で中学校や高校の制服は、性別で分かれているんだろう。」

「こんな事を考える自分は女なのか。男なのか。」

不安や違和感が頭の中を駆け巡りました。ただ、その気持ちの原因が正体不明で分ならず、まして人に上手く伝えられない不安から、人に頼らず、自分の心だけに留めておいた方が良いのだと思っていました。

しかし、先生方や家族は僕の気持ちにとっても丁寧に寄り添ってくれました。先生方は、学校で過ごしやすいように考えてくれたり、不安に思っている事に耳を傾けてくれました。

家族は、僕の気持ちを否定せずに

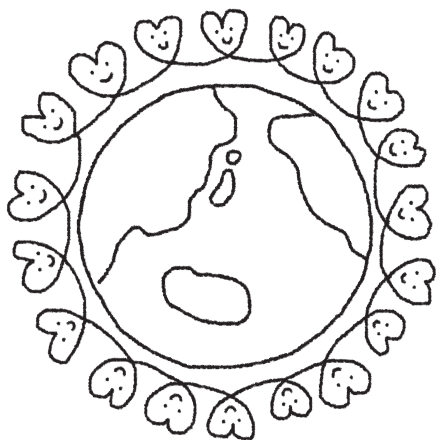
「今すぐ決めなくてもいいから、色々な経験をしながら、大人になっていけばいいんじゃないかな。その為のサポートはいくらでもするからね。」

と言ってくれました。そして何より嬉しかったのは、

「女だから、男だからじゃないんだよ。あなただから好きなんだよ。」

と言ってくれた事で自分の存在を認めてくれる人たちがいると改めて知れた事でした。僕には、理解してくれる大人や友達がいてくれたから、自分らしく過ごす事ができています。でも、一人で抱えて悩んでいる人や、自分の気持ちにふたをして生きている人もたくさんいます。僕も大人になっていく上でもっと悩む時が出てくるかもしれない。

ません。そんな時に、周りに一人でも理解してくれる人がいるだけで自分の存在を認めて生きていく事が出来るのです。



お互いを理解する心

小学校六年

石^{いし}坂^{ざか} 菜^な月^{つき}

私は少し前に、インターネットで東京オリンピックのバスケットボール日本代表の、オコエ桃仁花さんが自身のツイッターで幼少期から周りとの肌の色がちがうことに苦しんでいた経験をつづった記事を読みました。

オコエさんには、プロ野球選手のお兄さんがいます。二人はナイジェリア人のお父さんと日本人のお母さんの子どもで、人種差別に苦しんだ経験があります。「肌の色鉛筆」で、親の顔をかくのが一番つらかったそうです。

「なんでこれが肌の色なんだろう。肌の色はこうあるべきなんだ、と自分で思ってしまった。」と言っていました。私はこの記事を読むまで肌の色は、私の中で一色しかなくて、何も感じなかったけど記事を読んで、確かに日本人の肌の色だけで「肌の色」と呼んで、「肌の色鉛筆」は日本人の肌の色で、「人の肌は肌の色で塗る。」と言うのが普通になっているのがおかしいな、と初めて気づきました。

この話をお母さんにすると、

「え？今は肌の色じゃなくて、うすだいたいとかパールオレンジっていうんじゃないの。」と言われました。言われてみれば私の色鉛筆にはうすだいたいと書いていますが、友

達や先生と話すときには肌色と言ってしまいます。

このように、無自覚に肌色と言う言葉を使っていたことにドキッとしました。

また、オコエさんのように、国籍のちがう両親から生まれた子どもたちのことを、「ハーフ」と呼ぶことも、差別になるかもしれないと言うこともお母さんから聞きました。「ミックス」や、「ダブル」と言う呼び方もあるそうですが、呼ばれる本人に決める権利があると思います。

このようなことは、「お互いを理解する心」をもって、話をすることで、苦しい思いをする人が減ると思います。

私は、さまざまな立場の人の気持ちを理解できるように、これからもたくさんの方の知識を学んでいきたいと思っています。

お兄ちゃんは障がい者

中学校一年

丸^{まる}尾^お優^{ゆう}人^と

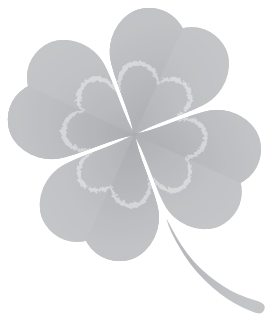
僕のお兄ちゃんは障がい者だ。5年前に急性脳症になり、言葉を失った。すべての感情を失い、家族の事も、学校の友達の時も忘れてしまった。だけど、家族はもちろん、学校の友達や先生、福祉サービスの人たちが優しく声をかけてくれたり困っていることがあれば助けてくれた。そのおかげで徐々に僕たちの事や友だちの事、先生の事を思い出してきた。悲しい感情、嬉しい感情も取り戻してきた。そして今では、笑顔で元気に毎日過ごしている。

お母さんは言った。「幸せは、頭が良いとか運動神経が良いとかそういう持つてい
るもので決まらない。心で決まるんだよ。健康で元気な心。その心は家族であり周囲
にいる人の優しさと愛情でつくられるんだよ。お兄ちゃんはみんなのおかげで今、幸
せなんだよ。」

お母さんの言葉を聞いて僕は思った。たとえば障がいがあつたとしても、周りの人が
可哀想と決めつける事は失礼じゃないかと。僕は正直、今まで障がいを持つている人
に対して可哀想という感情を持つていた。しかし、その事自体が偏見だという事に気
付いた。だから僕は、そういった偏見の目で見ないで、その人自身を見て、判断しよ

うと思った。ただ身体に不自由がある事は真実だから、困っていたら手を差し伸べたい。そして、障がいのある人の事をバカにしたり、いじめたりすると、健康だった心が傷つき、不登校の原因になる可能性があると思う。だから周囲の人たちの優しさや配慮が重要だと思った。僕はそういう場面に出くわしたら見て見ぬふりをしないで、率先して助けたいと思う。

お兄ちゃん、啓人が、笑顔で楽しい日々をこれからも送ってほしい。障がいを持っている人たちが生きやすい社会をつくっていききたい。



知ることの大切さ

中学校一年

吉^{よし} 富^{とみ} 百^{もも} 花^か

私は夏休みに、父が日本人で母がロシア人の高校生が主人公の物語を読んだ。彼は白人系の外国人に見えるが、一歳半からずっと日本に住んでいて日本語を話す。彼は小さいころ、「ガイジン」、「オーベール」などと友だちに言われて、嫌な思いをした。「かっこいい」と外見のことを言われるのも嫌らしい。私は、「ガイジン」と言うのは、嫌な気持ちにさせると想像がつくが、「かっこいい」と言うのもそうだとはい、思いもよらなかった。知らないということとは、人を傷つけてしまう可能性を知った。この作文を書くときのテーマの中に、私がよく知っている人のものがある。障がいがある人のことだ。私の弟は、ダウン症なので、障がいがあることになる。ダウン症の子は発達がゆっくりで、弟も歩きはじめたのは三歳だし、言葉は九歳の今でも聞き取りにくい。でも私から見たら、弟は生まれたときからいるし、弟なりにゆっくり成長しているのだ。障がいがあるようには感じないのだ。また、弟は小さい頃から私と一緒に外で遊んでいた。私の友人たちも一緒に遊ぶことは多く、自然に受け入れられていた。知っているということは誤解を生まないのだ、気付かない間に人を傷つけない。

そんな弟も保育園のとき、心配になる出来事があった。

「汚い、逃げろ。」

と笑いながら数人の同級生が、弟から逃げていくのだ。よく聞いてみると、鼻水をふかない弟が汚い、と非難していた。年齢が上がるにつれ清潔にすることを学んでいく同級生に対し、弟はそれを理解する発達の段階ではなかった。自分で鼻をふけないのも無理はないのだ。母が保育園の先生に相談し、弟はダウン症で発達がゆっくりなので、みんなの何年か前と同じようにしかできないことを伝えてもらうことで、理解を得られた。保育園の先生は、弟をみんなと同じようにさせてあげようと気をつかってくれた。保育園の先生は、違いを知ることと解決するときがあるのだ。

この作文のテーマがたくさんあることから、いろいろな人権の問題があるのだと分かる。人にはそれぞれ違いがある。私は、知ることと理解し合い、人を傷つけることをさせられる場合があると考える。思い込みで人を傷つけることがないよう、気にしていきたい。

私とズボン、弟とスカート。

中学校一年

中^{なか}野^の佑^ゆ美^み

「これ、はいてみたい!」

ある日、弟は、手にスカートを持ち、店でそう言った。

前からそういうことを弟は言っていた。私と母は冗談だと思っていたので、軽く流していたけれど。

母は、スカートを見て、少し驚きながらも、

「うん、いいよ。何枚か試着してみよっか。」

と言った。私もそう言いたかったが、「男がスカート」ということへの警戒心が消えなくて、おもわず、自分の手をにぎった。そして、泣きそうになった。

「どうして私は、スカートの弟を受け入れることができないんだろう。」とぐるぐると考えた。

そして、モヤモヤしている間に試着が終わったようだ。買う物を決め、持って歩き始めた瞬間、父が現れた。

父は、スカートを見て、いきなり怒鳴った。

「男はズボンやろ!今すぐ戻して来い!」

私は、ふるえあがり、弟は、涙目になったが、母は、負けじと、

「好きなもんはいたらええやろ！」

と怒鳴り返した。お店で、夫婦げんか、ぼつ発。

話は変わるが、父はとても頭がかたい。だから、「女はスカート、男はズボン」という考え方を今もしている。「女はスカート」は、なくなったが、やはり「男はズボン」はまだ健在のようだ。

さっきの夫婦げんかは、終了したようだ。勝者は、母。父はぶつぶつ言っているが、弟はスカートを買った。

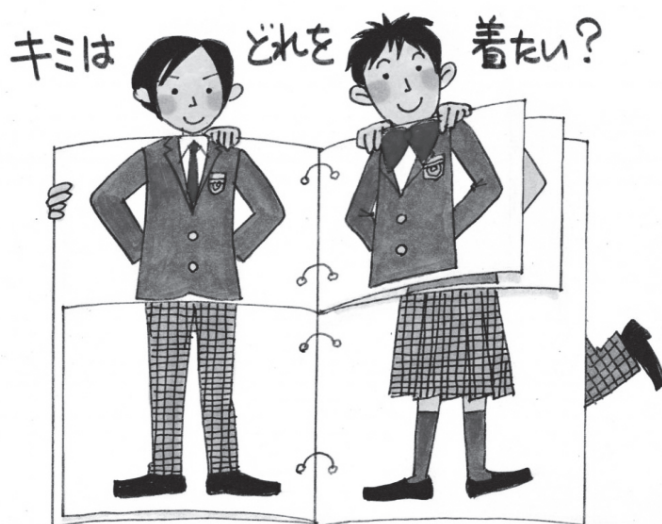
そして、いざ、弟がスカートを履く！父のいる時に履いたら、またぶつくさ言われそうなので、仕事の日にした。

弟が、友だちと遊んで帰って来た。やはり変だと言われたらしい。私は弟がかわいそうになった。

考えてみれば、私が今はいっているズボンだって昔は、認められていなかったのかも知らない。そう考えれば、弟のスカートも、いつのまにか世間に溶けこんで行くのだろう。

その日から私は、弟のスカートを少しずつ受け入れられるようになったのだと思う。「ズボンは男」というのは、「男のランドセルは黒」と言っているようなもので、私は、今のジェンダーレス社会にはあっていないし、「ジェンダー平等」という目標が遠の

くと思う。だから私は、みんなに、少しずつで良いので、決めつけ、いやせめて、「男はズボン」という考えを改めてほしい。



出典：伊丹市NPO法人あなたらしくサポート(愛称：らしーく)

LGBTについて

中学校一年

永^{なが}井^い七^{なな}海^み

私は、今回の人権作文を書くにあたって、LGBTについて少し考えました。今回は、そのことを私の体験と一緒に書いていきたいと思っています。

まず私が体験したことです。私が小学六年生の時と中学一年生の七月の中間ぐらいのことです。私は、同級生の女の子を好きになりました。小学六年生の時、女の子を好きになったと分かった時は、男の子を好きになるようにそれも普通だとは思っていました。ですが私は中学一年生の七月の頭ごろの道徳で「LGBT」について知りました。私はLGBTなんて言葉は聞いたことがなかったので、どういう意味なんだろうと思いました。私は、道徳の授業を受けたあと、私は「自分も小学六年生のとき、LGBTと呼ばれている人だったんだ。」と思いました。

そして、私が中学一年生の七月の中間ごろ小学六年生の時と同じように同級生の女の子を好きになりました。私は「今、自分はLGBTと呼ばれている人なんだ。」と思います。そして私は、「同級生の女の子のことが、好きになった。」と友達に言ってみようかなと思いました。私は、友達に伝えた時「え、気持ち悪い。」「女の子のこ

と好きになるとかありえない。」「そう言われると思っていました。でも実際友達に

言ってみると「そうなん！頑張りや。応えんしてる。」と言ってもらえました。最初は否定されると思っていましたが、否定されませんでした。

そして、私が今回の作文を書くにあたって考えたことは、LGBTと呼ばれている人に対して否定する人が減っていったら良いなと考えました。なぜなら、人を好きになることに對して否定していたら女の子が男の子を好きになる、その逆パターンにも否定していることには変わりないと思うからです。私は実際にLGBTと呼ばれている人になったことがあるので、個人的な意見ですが、同性で付き合う、結こんするというのはその人の意志なので、禁止する、否定する、そんなことは例え、えらい人でも絶対にだめだと思います。なぜなら、同性の人を好きになるということは、その好きになった人からすると「女の子が男の人を好きになるのと一緒にゃん！」そう考える人が多いと私は思います。私がそうだったのでそう思う人は少なからずいると思います。

そして、私はLGBTという言葉はわざわざつけなくて良いと思います。なぜなら、そういう名前をつけられたら普通じゃないと読み取る人は少なくともいると思ったからです。

最後にまとめると、LGBTと呼ばれる人はたくさんいて普通なことだということを知り、そんな世界になってほしいと私は思います。

男女平等

中学校二年

丸まる橋はし なつ実み

先日、家族で来年小学生になる妹のランドセルを選んでいた。パンフレットには、とてもたくさんの色や模様が紹介されていた。そのときふとした母の発言に私は驚いた。

「お母さんが小学生のときは、ランドセルの色といえば男子は黒で女子は赤だと決まっていたんだよ。」

と言った。今までは当たり前にたくさんの中から選ぶ権利があるのに、昔はその楽しみがなかったのか。しかし、たくさん色があり、多様性も認められている中で、例えば男の子がピンクのランドセルを背負っていたら私は少し違和感を抱くだろう。学校や公園、施設のトイレも男性のマークは青、女性のマークは赤が一般的だ。このことをきっかけとしたニュースがあった。内容は、市民が公園のトイレの外壁の色で男女の区別をやめようというものだった。このニュースを知って私は、色の区別をなくすと不便になる人もでてくるのではないかと思った。トイレの入り口にはたいいていの場合、男性・女性のマークが描かれているが、多くの人はマークの細かいところを見ずに色だけで判断しているのではないか。私ならマークが入れ替わっていても、赤

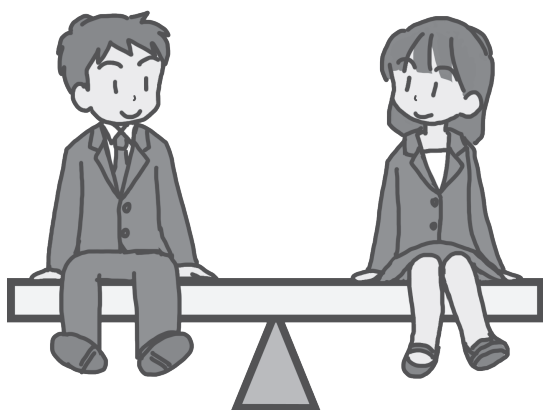
の方に入ってしまうだろう。

なぜ多くの人の間で色によるイメージが根づいているのか。そもその発端は何なのか。調べてみることにした。日本で色の区別が始まったのは平安時代。女性の間では深紅色の緋袴が愛され、公式の場でよく用いられた。その頃の男性の一例として、貴族・公家の家政機関に勤仕する青侍の袍の色は青系であった。このような歴史により、現代の日本では男性が黒・青、女性が赤という固定観念が社会をつくってきた。色による区別は便利な一面もあるが、LGBTQなど、性的少数派の人の心を傷つけてしまうかもしれない。だが、トイレのマークの色を同じにしよう、細かいところまで見えない人や文字が読めない子供が困ってしまう。誰もが快適、というのはどういうことなのだろうか。誰もが平等に生きるためには、どうすれば良いのか。

日本には、男女がお互いにその人権を尊重しつつ、能力を十分に発揮できる社会のために作られた「男女共同参画社会基本法」や募集、採用、昇進など、雇用に関して男女の間の差別を禁止する法律、「男女雇用機会均等法」がある。また、SDGsの目標にも、「ジェンダー平等を実現しよう」がある。日本は男女平等で一四六か国中一一六位だった。特に政治・経済が低かった。

このような課題を解決するために私は、「男だから」「女だから」と言わないようにする。そして多様性を認める。私が考える「誰もが快適」とは、固定観念にとらわれず、偏見にも縛られず、のびのび生活できる社会があることだ。昔からの固定観念を一瞬

で変えることは容易ではない。しかし、一人ひとりの意識は、すぐ変えられる。今日から私は男女差別をなくすために行動し始めよう。



人に頼ることの大切さ

中学校二年

権ごん 野の 穂ほの 華か

私は過去にクラスメイトや友達から暴力や暴言、陰口などのいじめを経験しました。その時は「自分が全部悪いのかな」、「自分はこの世に必要とされていないのかな」、「死にたい」と自分を追いつめていました。そしてストレスがたまり、体調をくずして学校に行く日が減りました。でもそんな時には、両親や学校の先生が話を聞いてくれて、加害者と話し合いをして解決してくれました。しかし、解決した今でもあの時のことは記憶から消したくても消せない過去になっています。今思うと、私の周りには優しくて、助けてくれる人がたくさんいたんだと思います。たまに、テレビでニュースを見ていて、いじめによつて自殺したというニュースを目にするとき、亡くなった人の周りに頼ることができる人や助けてくれる人がいなかったと思うと心が痛くなります。なので私は頼ったり、助けを求めることが大事だと思いました。そしてそう思うと同時に私は家族と友達、先生にはとても感謝しています。だからこそ、これからは、友達が気軽に頼ってくれるような人になって、周りの人を助けたいです。



あふれる優しさ

中学校二年

松まつ 生いけ 遥はる 花か

私は校外学習に行けなかった…ああ、なんてついてないんだろう。そんな風に思いながら自宅待機の日々を過ごしていた。誰にも当たることもしないし、この気持ちはどうやったらずれるの？

ある日、家族が新型コロナウイルスに感染してしまった。それを知った時、驚くことしかできなかった。いきなりの身近な出来事で信じられなかった。そして一週間の自宅待機生活が始まった。ずっと家にいないといけないのが、私には苦痛でしかなかった。それ以上に残念だったのは、校外学習に行けなかったことだ。その日は私の誕生日でもあつて、とつてもとつても楽しみにしていたのだ。正直、行けないと分かった時は泣きたくて仕方なかった。

校外学習の日、私は家でみんなが楽しんでいる姿を想像していた。ホームページに写真がアップされるのを見て、みんな楽しんでいるよかったという思いと、この中に私もいて楽しむはずだったのという複雑な思いを抱えることになった。

友達が行く前から「お土産買ってくるね！」とたくさん声をかけてくれていたことにとっても感謝していたと同時に、その言葉がともうれしかった。そして、実際にお

土産をみんなからたくさんもらって、みんなと校外学習に行ったような気分を味わうことができた。そのみんなの気づかいに感謝しかなかった。「私はなんて幸せ者なんだろう」と心から思った。

この自宅待機の日々を過ごした中で、たくさんのお優しさに触れた。毎日授業ノートを送ってくれる子、大丈夫？と連絡をくれる子、相談に乗ってくれる子、先生や友達、みんなのお優しさと気づかいで満たされた。

この経験をいつまでも忘れずに、どんな時も人に寄り添って行動できる人間になりたい。

平和な世界にするために

中学校三年

奥井美莉おく いの みり

私は、大きな疑問を持っている。それは「なぜ、世界から争いがなくならないのか。」ということだ。人間は、多くの過ちを繰り返しながら時を進めてきた。そんな過ちを繰り返す我々には、平和を願う人々の思いや声が、今を生きる私たちには届くことがないのだろうか。

私は、今年、修学旅行で広島県を訪れた。限られた行動時間の中で、原爆ドームや、広島平和記念資料館を見学することができた。以前から、第二次世界大戦中の日本について、深く理解したいという気持ちがあつた。その為、当時の様子を知ることができる広島県に修学旅行先が決まった時は、とてもうれしかった。しかし、そんな安直な考えを一瞬で消し去るのかのように、その物々しい建物は「1945年8月6日午前8時15分」で止まっていた。

唯一の被爆国に原子爆弾が投下されてから77年、世界を震撼させる出来事が起こった。それは、ロシア対ウクライナの戦争である。77年目を迎えて8月15日現在でさえ、両国間で行われる戦争は終結していない。毎日のようにテレビで放送される映像には、家族や友人を亡くして悲しむ人の姿や、故郷を攻撃され、逃げ惑いながら地下鉄へ避

難している人々の様子が映っていた。戦争を体験したことがない私にとって、テレビに映し出されている映像が、今現在同じ世界で生きる人々が経験しているものだと理解するまで、時間がかかった。私と同年くらいの少年、少女たちが涙を流しながら「家族に会いたい」「学校に行つて、友達と勉強していた日々を返してほしい」と話す姿を見て、当たり前が当たり前ではなくなるという「一瞬の恐怖」がひしひしと伝わってきた。

私が暮らす日本は、世界で唯一原子爆弾が投下された被爆国である。広島や長崎に投下された。たつた一発の爆弾によつて多くの人々の命が一瞬で奪われた。老若男女問わず奪われた命には、一人ひとりに生きる権利が与えられていた。未来を夢見て生きていた人々がほとんどであつただろう。「戦争が終われば。」と踏ん張りながら生きていた人々がほとんどであつただろう。だから、戦争体験者の方々が「戦争は二度としてはいけない。すべてを無にしてしまう。」と涙ながらに訴えているのではないだろうか。

現在も戦争が続いているロシアとウクライナにも、たくさん希望を持つて、未来を思い描いている人々がいる。その人々の人権を保障することなく、戦争を続ける両国のトップに対し、私は怒りを隠せない。唯一の被爆国国民として、戦争の悲惨さや命の尊さ、他者を思いやることの大切さを幼少の頃から学んできた。だからこそ、個々に与えられた権利が保障される世界でなければならぬと強く思う。その為に、今を

生きる私たちは、他者を受け入れ、認め合う人間性を身に付けていかなければならぬ
いと考える。そのような力が身についた時、人々に保障された人権がすべての物事か
ら守られる世界になるのではないかと思う。ロシアとウクライナ間で行われている戦
争が直ちに終結され、平和的な解決に向けて話し合いが行われることを願うばかりだ。
我々人間たちは、多くの過ちを繰り返してきた。しかし、それと同時にその過ちを
反省し、進歩を続けてきたことも事実である。「世界から争いをなくすことができな
いのか。」という私自身の疑問に対して、多くの人は、「なくすことはできない」と答
えるだろう。だが、私は「なくすことができる」強く信じている。なぜならば、人間
は過ちを反省し、その過ちを繰り返さない努力をすることができる生き物だと思っ
ているからだ。同じ過ちを繰り返さない為に、私たちは他者の意見に耳を傾ける人間へ
と成長することが、平和に向けた大きくて小さな一歩になるのではないだろうか。



自分らしく生きたい

高等学校一年

久保陽和

「LGBT」これは最近よく聞くようになった性自認の表現である。単語自体は知っていても一つ一つの意味について考えたことがなかった。でも最近それについて考える出来事があった。

用事があつて、私は天王寺に行った。その駅のホームでセーラー服を着て歩いているおじさんに会った。私は不覚にも笑ってしまった。でもその後私は思った。本当に笑うべき行動なのか、ただこの人はこの人がしたい格好をしていただけで、誰にも迷惑をかけていないと。

私はこの出来事をきっかけに色々なことを思い出した。私は小学生の頃からスポーツをしていて髪が短かった。よくまわりの子たちに「オカマ」「お前ホンマにオンナなん？」など色々言われてきた。少しスポーティーな服を着て町を歩くと「お兄ちゃん？」などと性別をまちがわれてきた。どうしてそんな風にまちがわれないといけないのか、私はずつと疑問に思っていた。それを母に尋ねると「そんな格好してるからやん」と言われた。その時は何も感じていなかったが、今になって思う。人はその人の髪型、服装で勝手にその人が男か女か決めてしまっている。例えば赤やピンクは女

の子、黒や青は男の子というイメージをもっている人が少なからずいると思う。でもそれはただのイメージだけでどんな色を好むのもその人の自由だと思う。自分の勝手なイメージだけで性別を判断してしまうことも同じだ。それはその人自身が決めることでまわりが決めることではない。でも誰にだってまちがいで人を傷つけてしまっているかもしれない。その時はすぐに謝罪をして認め合うことが大切なかもしれない。

79億人というこの地球に住む中で私たちは多様性を理解し認め合って共存していくことがこれから求められていく。一人一人の考え方次第で生きやすい世界になると思う。自分の個性も大切にし、自分を好きになれる世界で私は自分らしく生きたい。

私はバイトがしたい

支援学校専攻科二年

坂^{さか}野^の水^み咲^{さき}

私は生まれつき聴覚障がいがあり、聴覚支援学校でずっと育ってきた。聴覚支援学校のほかの世界も知りたい。社会勉強をしてみたいと思い、昨年の冬ごろにバイトにいくつか応募してみた。電話ができないので、電話代行リレーサービスというアプリを使って、興味のあるバイト先にいくつか電話をした。飲食店の調理のみのバイトで、面接日を決めようという話になると、

「聴覚障がいがあるから、お客さんとコミュニケーションを取るのが難しいかもしれないね。」と言われ、疑問に思い

「キッチンだと注文を紙で見ても、作ることができますので、そこで働かせてください。」とお願いましたが、

「それでも厳しいですね。」
と、あっさり断られた。

また別の飲食店でやつと面接までこぎつけても、そこでも同じようなことを言われ、「聞き取りは難しいですが、声を出して話すことはできます。」
と食い下がって見たが、「そうですか。少し相談してみます。」

と裏へ回って何かを話していたが、結局「厳しいですね。」

だった。これが四回も続いた。何がだめだったのか分からず、それぞれの飲食店で聞いてみると、

「キッチンでも何かあったとき責任が取れませんから。」という理由だった。

それだけではなく、ほかにも理由があると思う。面接のとき、健常者に比べて特徴のある発音をする私の声を聞いて、みんなびつくりする反応をするからだ。口形を読み取って簡単なものであれば答えることもできるが、そのたび面食らったような顔をされるからだ。これは結局、聴覚障がいについて理解がまだまだ浸透されていないからなのか、今まで聴覚障がい者を雇用したことがないからなのか、または聴覚障がい者とかかわったことがないからどう接したらいいか分からないからなのか。私たちが聴覚障がい者でも、もつと働きやすい世の中になってほしいと思うきっかけとなった。それよりも『聴覚障がい者だから』という言葉だけで、何もできないと否定されたような気持ちになったのはとても悔しかったし、悲しかった。でも、一度は会ってみようと思ってくれる人がいた。という事実もあるので、今後も頑張ってバイトを探してみたいと思う。

田中秀樹という名の中国人

成人 田中秀樹
た なか ひで き

「こんにちは、田中秀樹です。」これは13歳になった当初の私が言い続けた慣れない言葉だった。

私（肇 哲）は中国生まれ、中国育ちで、中学1年生になるまでは故郷である中国の瀋陽市を離れることを全く想像することができなかった。しかし、両親の都合により、13歳から日本の富山県で生活し始めた。

富山県での生活は、学校まで自転車で10分、一人部屋、休日は車移動など、正直に言うて疑うほど快適な生活であった。

それに比べて中国では、小学校まで徒歩1.5時間、年間の気温差は60度、就寝用ベッドの代わりに「炕（kang）」という土やレンガで作った硬い寝台で家族全員が生活していた。日本の中学校に通い始めた頃は、同級生から「中国にはテレビがあるの？」、「食事は何食べるの？」と、今考えれば単なる好奇心による質問だったと思う。しかし、そこに素直に質問に回答できない自分がいた。そこにはおそらく、自分が「異種」として見られていたというのに耐えきれない自分がいた。

気が付けば、私は自身が中国人であることをばれないように一生懸命に日本人の発音、

振る舞いを真似していた。自身の本来のアイデンティティを見失ってもかまわなかった。

そこには、自分でしかわからない「コンプレックス」があったのであった。

そして、この状況は大学を卒業し、就職後まで続いた。気持ちの変動があったのは、就職後の経験によるものであった。

入社後は一年間現場第一線（鹿児島県）で研修を受けていた。「話し相手が欲しい」という衝動にもかられ、住まいの付近にある居酒屋に行った。マスターは想像以上に親切な方で、気が付けばともに休日を楽しみ仲になっていた。マスターは多くの人を見てきたからなのか、私のコンプレックスに気づき「秀樹は秀樹だよ、そのままでもいいんだよ」と声をかけてもらった。その瞬間、目頭が熱くなった。自身が約10年間抱え込み続けたウエイトが一瞬にして下ろせた気がした。これ以上になく楽になった。

次第に「私は中国人です。」と躊躇なく言えるようになった。今となれば、周囲に自身の経験を話したり、中国ならではの文化を紹介したりしている。自分が「自分」でいることがこんなに素晴らしいことなんだと気づいた。

人生の節目に必ず助つ人が現れるという、マスターは間違いなく私の恩人である。この場をお借りし、感謝の意をお伝えしたい。

最後に、私のような自分のアイデンティティを見失いそうな人にお伝えしたい。

「あなたは「あなた」のままでもいいよ。」

〔事務局(注)〕「この題名にある取り消し線には私の思いが込められているので、作文を最後まで読んでいただければありがたいです。」(筆者より)

日系アメリカ人？日本人とアメリカ人!! 人間。

成人 米村真理

「アメリカ人」と耳にするとどのようなイメージが浮かぶのでしょうか。肌が白く、金髪のジョン・スミスみたいな方を想像しませんか。私はジョンではなくマリです。アジア人の顔をした女性です。私は日本人でアメリカ人です。

祖父母は指宿出身で、アメリカに移住して母が生まれました。父は北海道出身です。彼はアメリカに移住し、カリフォルニアで母と一緒に花農園を始めました。田舎にあるこの小さな花畑が私の始まりです。

ふるさとに住む人たちは九割がメキシコ系で、日本人は少なかったです。私は他の皆のようになりたかったのですが、とても目立ちました。子供たちは私をよくいじめました。私は日本人である事を恥じていました。どこにいても、人と違う事は常に難しい事です。

家では、両親に遠慮のような日本の伝統的な価値観を教えこまれました。アメリカの学校では、個性を大切にするように教えられました。西洋と東洋の相反する価値観を調和させる事は、生涯を通じて絶え間ない努力が必要でした。

日本文化に興味を持ち、一年半前に日本に来ました。日本では、うまくいくでしょ

うか？言葉が分からなくて大変でしたが、日本人に見える事が最大の課題でした。外国人に見える外国人は失礼でも「仕方ない、外国人だ」と許されます。私にはこの言い訳を使う特権がない。何も知らない外国人ではなく、偉そうな日本人女性として見られるのです。残念ながら、日本でもうまくいきません。

結局、私はどこに属しているのですか？私は誰？帰国子女？ハーフ？アメリカ人？日本人？私は両方であると結論付けました！両方の世界と文化を包含しています。私はフル日本人、フルアメリカ人なのです。

さらに、自分は人間だと思っています。私は世界市民です。世界はこれまで以上に繋がっています。今は、コロナ禍で分断も感じていますが。私たちは、相違点ではなく、類似点に焦点を当てる必要があります。そうすれば、私たちは繋がるのです。肌の色、人種、宗教に関係なく、誰もが話を聞いてもらい、愛され、人と繋がりたいのです。誰もが同じです。私たちは皆人間なのですから。

人権は政治家や社会が解決すべき問題だけでなく、一人一人が考える事だと思えます。差別は暴力だけでなく真実に基づかない噂など固定観念も含まれるのです。見た目だけですぐに、判断しないで下さい。強そうに見える男性でも心は弱く、弱そうに見える女性でも心が強いかもしれません。成功しているように見える社長が敗北を感じているかもしれません。ホームレスが何かを教えたり、子供たちが最高の教師になる事もあるのです。そして東洋風の女性は日本人でもありアメリカ人でもありえます。

したがって、ジョンやマリのような人に出会った時は、見ただ目で判断しないで下さい。
あなた方と同じ人間です。あなた方自身が扱われたいように、敬意、優しさ、そして
尊厳を持って彼らに接して下さい。



つながりを求めて

成人 大浦優子
おお うら ゆう こ

中島みゆきの名曲『糸』は、三十年前にリリースされて以来、多くのアーティストがカバーしている。（縦の糸はあなた／横の糸は私）というフレーズが印象的だ。結婚式の定番ソングというのも頷ける。コロナ禍で人との接触が制限されていた時、よく耳にし、気になっていた曲だ。

この曲は私が求めていた事に気付かせてくれる、糸は人とのつながりだと。

そんな事、前々から多くの人が言っていたし、改めて私が言う事ではないだろう。でも、日々のあれやこれや、忙しさに紛れて私の意識にはなかった。自由を制限されて初めて気付く、つながれないと淋しいと。この時期、電話で聞く声やラインのやりとりが嬉しかったし、筆不精なのに友人に葉書を書いたりしていた。

電話といえば、二十年以上前の義母の事を思い出す。

夜十時から深夜になる電話は、たいてい同居していた義母あて、そして必ずAさんからだった。電話口から聞こえるのは、消え入りそうな細かい声だ。電話を取り次ぐのは私の役目。たまに子どもが取った時は、「幽霊みたいな声の人から」と言っていた。急ぎの用ではなさそうなのに頻繁にかかってくるので、一度義母に『もう寝ています』

と断りましょうか」と聞いてみた。でも、「私しかないから」と、義母は必ず電話口に向かった。

Aさんは義母の高校の同級生だ。頭が良くてかなりの優等生だったらしい。「Aさんは病気になってちよつと変になった」と義母は話してくれた。どうも躁鬱病らしい。彼女は調子が悪くなったら、時間かまわず友人に電話をかけまくっていたらしい。そして、他の人から敬遠され、拒絶されていたのだらう。その義母も亡くなったが、電話に向かつて諭したり励ましたりしていた姿は忘れられない。

人は年齢に関係なく、自分の事を見て欲しいし、わかって欲しいのだ。特に、病気とかつらい立場になった時は、自分優先になつてしまう。しかし、つながりを求めて友人にかけた電話が、知らず知らずのうちに相手を苦しめていることがある。そしてその結果、糸が断ち切られてしまう。話を聞くだけとはいえ、それはかなり重いことなのだ。

今回つながりを考えていく中で、私は相談窓口が各種あることを知った。知らない人に相談するのはたしかに勇気がいる。でも、その勇気を出せば、専門家のアドバイスが受けられるのだ。

つながりの糸は一本ではない。公的な機関からも手が差し伸べられているのだ。社会の一員として、守ってもらうのは恥ずかしいことではない。少しの勇気を出すだけだ。そして、(いつか誰かの傷をかばう)自分を育てることができるかもしれない。

花咲く道を進む

成人(中学校夜間学級三年)

山内 多津美
やまうち たつみ

私は昭和十三年に、大阪の加賀屋で三男として生まれました。物心つくかつかないかという頃に、奈良の王寺に一家六人で疎開しました。それと同時に、母の苦労は一段と重くなりました。もともと遊び好きで仕事嫌な父が、徐々に家に帰らなくなり、しまいには家に戻らなくなりました。そこで母は、四人の子どもを育てるために、米を仕入れて闇市で売り始めました。私が小学校へ入学する直前に、母が闇米のことで、警察に連れて行かれました。子どもだった私と弟は怖さのあまり、ただただ泣いていました。この時ばかりは、父が恋しく、帰ってきてそばにいてほしかったです。幸い、母は説諭で許され、家に帰されました。が、このことがきっかけで、私と弟は王寺から、父の知り合いがいる河内天美へと連れて行かれました。そこにも子どもがおり、私たちはよくいじめられ、ひもじい思いもしました。特に幼い弟へのいじめはひどく、とうとう父に泣きついて、母の元へ帰してもらうことになりました。父も私たちを伴っていれば、母が自分のことを許すのではという目算があつたのだと思います。こうして二年余り過ごした河内天美から、王寺へと戻りました。帰ったとき、「思いつきり食べや」と言つて迎えてくれた母の言葉が、今だに耳に残っています。

そんな境遇でしたので、私は小学校に一日も通っていません。母の元に帰ってからも、自分でも学校に行きたいと思いませんでした。だからと言って遊んでいる訳にもいきません。その頃、人手がなくて困っていた隣村の工場が、子どもでも働かせてくれるというのでお願いしました。下駄の鼻緒を作る工場でしたが、私は事務所の伝言を工場へ伝えるというような使い走りをしていました。昼食はみんな自分で用意します。家で弁当を用意できない私をみかねて、社長の奥さんがこっそり準備してくれるようになりました。私はそのお昼をよばれるのが嬉しくて、休まず通いました。一日二百円程度の給料でしたが、自分なりに家計を助けました。七、八年はそんな生活が続いたでしょうか。ある時、私の将来について家族の話合いがありました。とにかく一生食べていけるように、何か技術を身につけさせようということになりました。これからは靴の時代だということ、靴工場につてを頼って、入社させてもらいました。婦人靴のデザインの勉強として、デパートの婦人靴売り場で何時間も過ごすのは、若い私には恥ずかしく辛いことでした。しかし食べていくためには、この道しかありません。好き嫌いなど言えるはずもなく、言われるがまま働き続けました。一人前の職人として、家族を養い、孫の顔も見ることができました。

今は、殿馬場夜間中学で、慣れぬ手つきで鉛筆を持ち、一生懸命、勉強しています。字を書くというだけで、手がこわばり、つつい力が入ります。入学は、息子の嫁のすすめでした。家族みんなが応援してくれています。今年で四年目になりますが、一

つでも多く覚えたいと、毎日頑張っています。応援してくれるのは、家族だけではありません。何かで困っていると、学校では誰かが必ず、手をかしてくれます。声をかけてもらうだけで、元気が出ます。

思えば、これまでの人生の中で、自分自身で自分の進む道を決めたことがなかったように思います。しかし、どの道にも、私に寄り添ってくれる優しい花のような人たちがいました。これからこの道を真っ直ぐ進んで行きたいと思っています。



選考にあたって

四十三回目となる「わたしからの人権メッセージ」。今回、二千六百六十一人のご応募をいただきました。審査員を代表して、ご応募いただいた皆様にご心からお礼申し上げます。応募作品はどれも力作ばかりで、一つ一つを読みながら、感動したり共感したりし、夢中になって審査をさせていただきました。

審査会では、人権テーマについての正しい理解、社会や世界の人権課題の解決に向けて「自分はどうあるべきか」、また「人権が尊重される世の中にしていくことを訴える内容か」、などに焦点をあてて、特選二十点、入選三十点を選考いたしました。

この「わたしからの人権メッセージ」の特長は、小学一年生から九十代の方まで、それぞれの年齢において、さまざまなテーマの「人権メッセージ」が自分の言葉で書かれている点です。特に、今年度の応募作品には平和をテーマにしたものが多く見られました。ウクライナ問題で自分と同世代の子どもが命を奪われ、苦しみおびえる姿に心を痛め、平和を願う心。堺大空襲について学校で学び、「平和な世の中をつくるために周りの友だちと仲良くしたい」と決意する姿。魚の体内からプラスチックが見つかったというニュースを見て海洋汚染について考えたもの。また、自分や家族が新型コロナウイルスに感染した時、不安を抱えて学校に行ったら温かい言葉かけや優しい気遣いを感じて、病気を理由に差別はいけないという思いを強くした体験。LGBTでは、同姓を好きになることも肯定

的にとらえることの大切さを訴えたものなど、多岐にわたるテーマでの「人権メッセージ」が寄せられました。

大切なことは、これらの地球規模で起っている平和・環境・人権などの問題を「ひとごと」にせず、いかに「自分のこと」として向き合うか、「理解」するだけでなく、自分が身近にできる一歩を踏み出すことではないでしょうか。自分の体験から発せられる、自分の言葉で書かれた素晴らしい作品がこの特選作品集にはちりばめられています。この冊子を手にされた方々も、ぜひ作品を通して人権について自分が感じたこと、考えたことを大切にしてください。そして、その自分の気持ちや考えを「書くことを通して表現」していただくことで、この「人権メッセージ」の取組の輪が広がることを期待しています。

地球上のどこの国に生まれても、一人ひとりがみな同じように「人間らしく生きる権利」をもっています。しかし、まだまだ差別や偏見により、人権が守られていない現実があります。「人権」は、私たちの生活の中で、とても身近で大切なものです。これからも人権についての学びを深め、ともに社会でつながり合い、人権尊重の社会を一緒につくっていかれると思います。

審査員長 島 原 宏 文

(堺市人権教育推進協議会 常任幹事)

第43回わたしからの人権メッセージ（2022年度） 応募作品テーマ内訳表 【応募数】

テーマ	学年	小 学 校		中 学 校			高等学校 /大学	一般	分野別 合計
		低学年	高学年	1年	2年	3年			
同 和		0	3	5			1	0	9
女 性		3	9	57			11	0	80
障がい者		3	43	111			21	6	184
外国人		2	20	72			12	7	113
子ども		6	34	112			6	2	160
高齢者		2	5	10			2	2	21
LGBT		0	8	103			24	2	137
平 和		91	751	151			58	3	1,054
環 境		4	17	77			31	0	129
HIV感染者ハンセン病回復者等の人権		0	1	2			2	0	5
犯罪被害者やその家族の人権		0	5	11			3	0	19
インターネットと人権		0	32	104			24	1	161
SDGs		3	39	39			15	2	98
セーフシティさかい		0	1	19			1	0	2
憲法と人権		5	13	19			1	0	38
新型コロナウイルス感染症に関連する人権問題		8	11	86			42	2	149
その他の人権		9	125	123			39	6	302
年代別応募数		136	1,117	1,082			293	33	2,661

【今年度応募作品の傾向について】

- 学校での平和学習をとおして「自分にとっての平和とは何かを考えた」「同世代の子が戦争で命を奪われたり、学校でも友だちに会えなかったり、日々おびえながら暮らしている姿にショックを受けた」という声、また「一般の人たちは関係ないはずなのに、たくさんの命が失われている戦争は絶対に許せない」といった戦争を憎むものや、ロシア人への差別的発言、ロシア料理店への誹謗中傷、ロシア語表記を駅からなくすことはおかしい等、平和に関するたくさんの作品が寄せられた。
- 新型コロナウイルス感染症について「自分がコロナにかかったから、改めて病気になって差別されるのはおかしいと感じた」「自分が実際に感染してしまって、学校に行くときに何か言われたらどうしようという不安を感じたが、実際に学校に行ってみると、友だちに優しく声をかけてもらって安心した。だから自分は病気になった人の気持ちがわかったし、自分は差別をしない」という体験に基づいた思いが書かれていたことが印象的であった。
- LGBT・ジェンダー平等について「女の子はピンク」といった性別による決めつけに着眼したものや、性別役割分担に関する大人の発言に疑問視するもの、心と体の性別が違う人に対しての偏見や差別をなくし、ともに生きることの大切さを訴える作品が多く見られた。
- 他にも、高齢である祖父母や障害のある家族との交流を通して当事者の人権について語られたものや、SNSで他者を傷つける書き込みは許せない、書き込む前に一度立ち止まるべきと訴えるもの、誹謗罪の厳罰化についても書かれていた。いじめについても、なぜいじめをするのか、いじめをする人の気持ちを考えてみた、と、自分なりに人権について考えたという作品が見られた。

御応募いただいた学校その他団体名

赤坂台小学校	新金岡東小学校	☆浜寺東小学校
☆浅香山小学校	☆泉北高倉小学校	原山ひかり小学校
☆市小学校	大仙小学校	はるみ小学校
☆英彰小学校	大仙西小学校	☆東陶器小学校
☆榎小学校	竹城台小学校	東三国丘小学校
大泉小学校	登美丘西小学校	東百舌鳥小学校
☆金岡小学校	登美丘東小学校	平尾小学校
金岡南小学校	登美丘南小学校	☆福泉小学校
☆北八下小学校	錦小学校	福泉上小学校
黒山小学校	庭代台小学校	槇塚台小学校
五箇荘東小学校	土師小学校	美原北小学校
☆さつき学園(小)	☆八田荘小学校	八下西小学校
☆城山台小学校	☆浜寺小学校	☆熊野小学校

泉ヶ丘東中学校	堺リベラル中学校	平井中学校
上野芝中学校	☆津久野中学校	☆美木多中学校
☆大泉中学校	☆殿馬場中学校夜間学級	☆南八下中学校
鳳中学校	庭代台中学校	☆美原中学校
☆金岡北中学校	☆八田荘中学校	八下中学校
☆金岡南中学校	☆浜寺中学校	☆陵西中学校
☆五箇荘中学校	☆浜寺南中学校	陵南中学校
(大阪府立)堺聴覚 支援学校(中)	原山台中学校	
	晴美台中学校	

大阪商業大学堺高等学校	だいせん聴覚	堺識字・多文化
☆堺高等学校	高等支援学校	共生学級「つどい」
☆堺リベラル高等学校	☆(株)クボタ堺製造所	☆堺自由の泉大学

※5年以上連続で応募があった学校や団体には、☆印をつけています。

御協力ありがとうございました。

第43回「わたしからの人権メッセージ」審査員

大 伴 和 子	堺市総務局人事部人材開発課 課長
大 町 むら子	堺市人権教育推進協議会 副会長
金 田 博 樹	堺公共職業安定所 管理部長
島 原 宏 文	堺市人権教育推進協議会 常任幹事
志 村 雅 史	堺労働基準監督署 副署長
増 田 亜紀子	堺市教育委員会事務局学校教育部生徒指導課 指導主事
森 内 啓 子	堺市人権教育推進協議会 会計
門 口 泰 久	堺市人権教育研究会 事務局員
八 木 直 亮	堺市立男女共同参画センター 館長

< 敬称略・五十音順 >

第43回わたしからの人権メッセージ 特選作品集

2022 年12月発行

編集・発行 堺市人権教育推進協議会
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3番1号
堺市人権推進課内
電話 072-221-9280
FAX 072-228-8070



私たちのまち堺から
人権文化の  を咲かせよう

この特選作品集は、「第43回わたしからの人権メッセージ」に応募された
2661点の作品のうち、特選作品20点を掲載したものです。